

最近は全くクリスマスにも各地で戦争が続いていますが、クリスマスのシーズンだけは、戦闘状態にあるところも、休戦するという伝統がありました。

そして、日本でも戦国時代、上杉謙信が、今川・北条の塩止めで苦しんでいる武田信玄に塩を送ったという逸話、「敵に塩を送る」ということわざができました。もっとも、最近の日本史を見直すような本を読んでいると、太平洋岸でできる塩が入らなくなって困っている武田信玄の領土に、上杉謙信は、日本海の海岸でできた越後の塩を高く売りつけて、大儲けをした、という話も聞きます。

そんな本を読んだりしているうちに、映画好きの私は、6年前、12月に入って、姿三四郎の映画を手に入れました。その年、宮崎では、黒澤明監督の映画を4本映画会で上映したので、黒澤監督の最初に作った映画を観たかったのです。たまたま、年賀状を作るのにインクを買いに電気屋さんへでかけると、当時、2週間に1回、隔週で、黒澤さんの映画とその解説のパンフレットがついているのが売られており、11月末に「姿三四郎」、12月の初めに、「続姿三四郎」が発売されていたのです。

早速それを観ていると、私は「続姿三四郎」の終わりのあたりで、感動してしまいました。

まず、最初の映画「姿三四郎」の話をすると、明治15年、会津から柔術家を目指し上京してきた青年、姿三四郎は神明活殺流に入門。ところがこの日、その道場の者たちは、修道館柔道の矢野正五郎の闇討ちを計画。近年めきめきと頭角を現し警視庁の武術指南役の座を争っていた修道館柔道を彼らはいまいます。ところが多人数で襲撃したにも関わらず、矢野たった一人に神明活殺流は全滅。その様に驚愕した三四郎はすぐさま矢野に弟子入りしました。

力があり、技がどんどん成長した姿三四郎ですが、すぐに喧嘩してしまうようなところがあって、それを矢野先生や和尚さんに指摘されます。そして、志村喬が演じる高潔な柔術家と対戦して親しくなり、それらを通して、彼は成長するのですが、姿三四郎の強さのために敵意を持っている相手たちとはどうしても対決しなければなりません。そして、道場の掟を破って、強い柔術家と対決して勝ち、新しい旅に出る所で終わります。

一応、映画の場面に出てきた、道場に掲げられた掟を書き出してみます。

掟 一、許可ナクシテ他流ト試合シタル者ハ破門ス

一、見世物興行物ノ類ニ、出場シタル者ハ破門ス

一、道場ニ於テ飲酒放歌或ハ道場ヲ汚シタル行為アリタル者ハ破門ス

続「姿三四郎」は、1945年5月に公開されました。これは日本が戦争に負ける3か月前です。ところが、明治20年という映画の舞台では、アメリカのボクシングと日本の柔術が大勢の観客の前で対決する場面も出てきます。外国人が戦争中の日本でどうやって出演したのかも気になるころでしたが、姿三四郎もその見世物に出て、相手を負かしてしまいます。

また最初の映画で、姿三四郎と対決して負けた相手の弟が、姿と対決することを望みます。これらは、道場の掟に反することになります。どうしても、対決を避けられなかった三四郎は、掟を破ったことで、自分自身を破門して、それを和尚さんに話に行くのですが、和尚さんから諭されます。

三四郎「和尚、今夜俺は修道館を出てきた。自分でこの札を外してきたんだ。」

和尚「う〜ん。お前が修道館を破門したような言い方じゃのう。悪い癖じゃ。」

三四郎「先生に破門されるのが辛いから、自分で外して来たんだ。」

ここで三四郎は道場の掟を破って試合をした、柔道を相手にわからせようとした、ということを話すのですが、和尚は、

和尚「三四郎、お前はバカだから、形のうえで掟を破ったことばかりに気をとらわれておるな。武道の意地じゃろう。お前の気持ちは柔道の掟を破っちゃおるまいが。道のための形は、道のために崩れてもかまわんじゃろうが。どうだ三四郎。その札をもう一度掛けて来い。」

三四郎「だめだ。」

和尚「掛けていいと悟れたら、今日でも、明日でも、十年でも二十年の後にでも、掛けに行くがいい。眠くなった、もう帰る。」

このあと、三四郎は夜も次の対戦相手が気になって眠れない、ということを訴えますが、そうすると和尚さんが一緒に座禅をすることになります。

そして、前に対決して勝った相手の弟たちと対決することになるのです。

今度は雪山の中での対決でしたが、三四郎はそれに勝ちます。しかし、傷ついた相手とその弟のために、山小屋で食事を作ってやります。彼らはそれを食べようとしないので、仕方なしに三四郎はそれを食べます。

対決に負けた相手は熱を出して寝ていて、三四郎はそれを介抱してやり、それに立ち会った弟も一緒にいました。三四郎が疲れて寝ていると、弟は憎い三四郎を殺そうとしますが、夢で三四郎がほほ笑む姿を観て、泣き出してしまいます。相手の心の大きさに感動したのでしょう。対決相手とその弟は、納得したように、すがすがしい表情で「負けた」と言い合います。

この映画についていた解説のパンフレットに、「男はつらいよ」の監督山田洋次さんが、当時11歳の少年だった時のことを思い出して、こんなことを書いています。

「まるでスーパーマンみたいに、『姿三四郎』の話題が子供たちの間に、日本中に、満ち溢れていましたね。どんなにカッコイイかって。大変なブームだったんじゃないのかな。」

その「スーパーマン」という言葉に私はハッとしました。私が映画に興味を持ったのは、「スーパーマンⅡ」という、2作目の映画に感動したからでした。1作目はただ驚いただけでしたが、2作目では、スーパーマンと同じ星から来た悪者3人組が、大暴れをする映画でした。その悪者たちが地球に来て、最初に降り立ったのは林の中で、ひとりは湖の中に入り、ナント湖を歩きだすのです。

これはイエス様が湖の上を歩いた奇跡物語を意識してのものだと思うと、映画の表面だけでなく、いろんな意味を込めていることに気づかされたのです。

この姿三四郎も、黒澤監督の唯一のシリーズでしたが、やはりキリスト教の福音を考えないわけにはいきませんでした。

日本がアメリカと戦争をしている時、この映画は敵を愛することの大切さを教えているように感じました。姿三四郎は、道場の掟を破るわけですが、そうしてまで自分を憎んでいる相手と同じ土俵？に立ち、かわりを持とうとすること。そして敵意を抱いている相手と関わりながら、相手に対して親切にすることを教えているのです。

続姿三四郎で、先ず思ったのは、三四郎を諭す和尚さんの言葉でした。

「三四郎、お前はバカだから、形のうで掟を破ったことばかりに気をとられておるな。武道の意地じゃろう。お前の気持ちは柔道の掟を破っちゃおるまいが。道のための形は、道のために崩れてもかまわんじゃろうが。どうだ三四郎。その札をもう一度掛けて来い。」

掟の根本が、神を愛し、神の作品である人を愛することだから、そのためには形だけの掟にこだわる必要はない、ということです。イエス様もマタイ2：27で『安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。』と言われました。

また、最後の対決の相手に対して、その相手を介抱したり、食べ物を与えるのも、パウロが、ローマの信徒への手紙12章20節で、『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。』と勧めていることを思い出しました。

このように、人の生き方を教えるためにこの世に来られたイエス様の誕生を祝い、それを模範としている例などを、現代に表現するために、映画が与えられた、と思いますと、イエス様の教えを理解するたと言話として、これからも映画を観て、感動を伝えたいと思ったことでした。

そしてついでに言うと、黒澤明監督と親しかった、映画作家の大林宣彦さんが、そのパンフレットの中で黒澤さんのエピソードとして、語っています。黒澤さんは「夢」という映画に盛り込めなかった「素晴らしい夢（平和がくる）」という話をしたそうです。

ある日、世界中の男が手に持っている銃を捨ててしまう。すると両手が空になる。しょうがないので、目の前にいる敵と抱き合う。すると、なんだかこのほうがいいなと感じるようになって、世界中から戦争がなくなる・・・。

これが発表された時「こんな小学生が書いたような夢を、『世界のクロサワ』と呼ばれる人がやったら、いくらなんでも恥だ」というのが世の識者とされる人たちの意見でした。結局、この話は諸事情で実現しませんでした。この話にこそ、黒澤さんの真の想いが込められていたんです。黒澤さんは、映画というのは平和を作ることができる唯一のメディアだと信じていらっしやった。

戦争がなければ、映画なんていなかった。戦争があるからこそそれを記憶して、平和を作るということのために、映画は歴史的に発明されてきた・・・。

そんな話をよくしてくださいました。そして、自分が小津安二郎さんやウィリアム・ワイラーといった先人の続きをやってここまで来たのだから、君たちも僕を通じて、先輩たちの続きをやってくれと。戦争は明日にでも起きるけど、平和を作るには400年は必要だ。君たちがそうやって僕の続きをやってくれば、400年なんてすぐ経つ。そうしたら世界から戦争がなくなる。すばらしいじゃないか。

そんなことを黒澤さんが語っていたと、大林宣彦さんが書いています。

大林さんによると、黒澤映画の1955年の「生きものの記録」は、その前年に起こった第五福竜丸の被曝事件を受けてのもので、興行的には散々だったそうですが、近いうちに見たいと思います。

今夜は、イエス様の誕生を祝う礼拝ですが、イエス様が誕生したのは、神様と人々、そして人々同志の間にある断絶を埋めて、関係を回復するため、敵をも愛する愛を示すのが目的であった、ということ、数年前に見た映画に関係づけてお話ししました。